

# 1970年代のフィリピン農業の地域的变化：1971年農業センサスと1980年農業センサスの比較検討を通して

西村，知

<https://doi.org/10.15017/2920781>

---

出版情報：経済論究. 78, pp.85-111, 1990-11-14. 九州大学大学院経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# 1970年代のフィリピン農業の地域的变化

—1971年農業センサスと1980年農業センサスの比較検討を通して—

西 村 知

## 目 次

1. はじめに
2. フィリピンの3大作物地域の特定
3. 主要作物の作付け面積の変化
4. 経営規模の変化
5. 70年代の農業変化の意味
6. おわりに

## 1. はじめに

フィリピン農業は、1970年代において、大きな変貌を遂げた。特に、稲作におけるいわゆる「緑の革命」にみられる農業新技術の導入と、米、トウモロコシを対象作物とする農地改革という形での土地の再配分がこの時期の大きな特徴である。しかし、70年代のフィリピン農業の変化は稲作においてのみみられたわけではなく、他の作物との関連からも総体的に考察する必要がある。

本稿では、フィリピン農業省が作成した1971年の農業センサスと1980年の農業センサスを比較することによって、1970年代のフィリピン農業の地域的变化を浮き彫りにすることを目的とする。まず、1971年の農業センサスによって、フィリピン全国の主要作物の構成表をプロビンス別に作り、さらに肥料の使用面積の割合を指標にして各プロビンスの農業集約度を特定する。そして主要作物と集約度との相関を考察した後に、3大主要作物、米、トウモロコシ、ココナッツそれぞれの作付け比率の高い各地域において、70年代に、資本主義がいかに浸透し、その結果としてどのような変化がみられたかを、特に主要作物の

作付け面積の変化，経営規模の変化を中心にみていくことにする。以上のよう  
に，本稿は稲作地帯のみをみるのではなく，フィリピン農業の地域的な変化  
を考察することを目的とする。

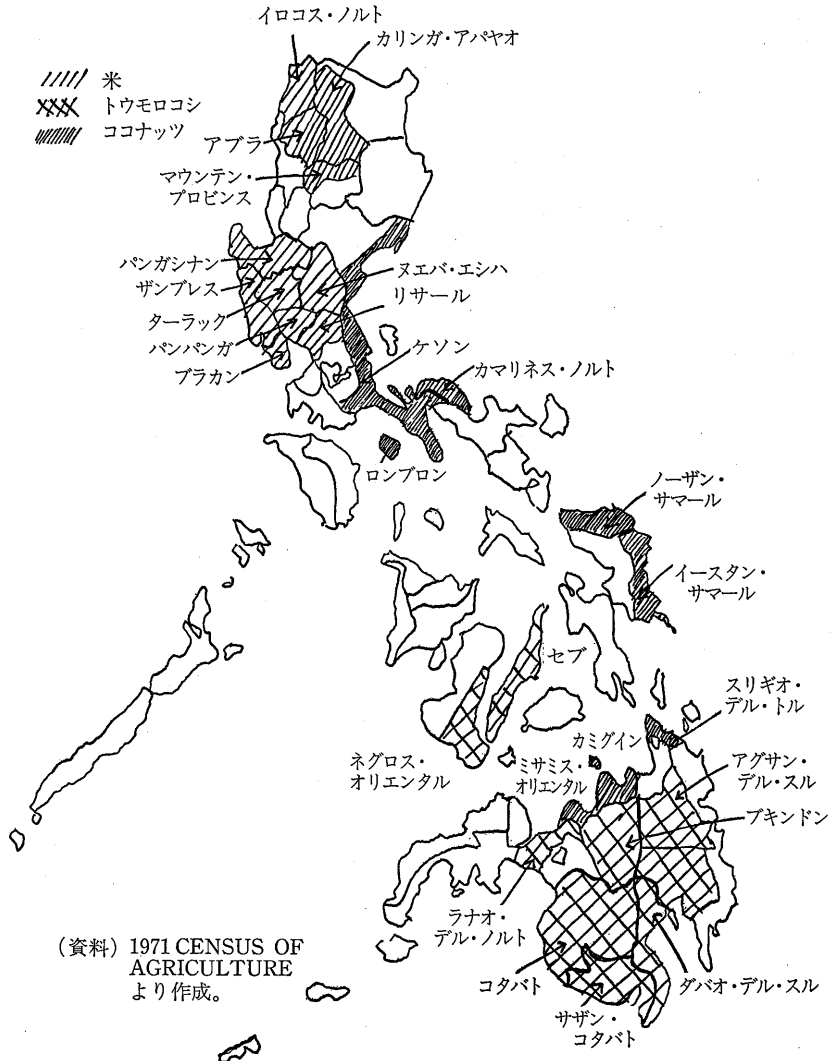


図1 フィリピン3大作物地域(1971年)

最後に、本稿は、フィリピン農業センサスの分析を中心に、構成されており、その経済的意味付けについては、フィールドワーク等の研究成果を参照すべきであったが、筆者の蓄積が十分ではなく、推定の域をこえない部分が多かったことを断っておく。この点は、筆者の今後の研究課題である。

## 2. フィリピンの3大作物特化地域の特定

1971年農業センサスの作物統計では、16種類の単年性作物、その他の単年性作物、14種類の多年性作物、その他の多年性作物についての統計が記載されている。単年性作物については、作物別に栽培農家数、栽培実面積 (PHYSICAL AREA PLANTED)、延べ作付け面積<sup>3)</sup> (EFFECTIVE AREA PLANTED)、生産量、生産額、多年性作物については、農家数、栽培実面積、植栽本数、生産量、生産額がプロビンス別に示されている。表1は、単年性作物については、延べ作付け面積の合計、多年性作物については、耕地面積の合計を足し合わせたものを総作付け面積とし、作物別に全体に占める割合を算出し、いずれかのプロビンスで、10%を越える8作物、米、トウモロコシ、タバコ、サトウキビ、カモテ (根菜類)、ココナッツ、アバカ麻、バナナを選出し、示したものである。この表からいえることは、米、トウモロコシ、ココナッツの3大作物が、作付け面積の点で他の作物を大きく引き離しており、かつ各プロビンスに広く分布していること、その他の5作物の場合、非常に特化傾向が強く、10%を越えるプロビンスは2から5のプロビンスに限定されている。よって、フィリピン農業においてこれら5作物に特化している地域は、全国的にみれば、特殊な地域であり、本稿では、考察外とする。さて次に、3大作物についてもっと詳しくみとめることにしよう。図1は、表1を基にして、米、トウモロコシ、ココナッツの作付け面積の比率の高いプロビンスをそれぞれ10選び、フィリピン全国地図に塗り分けたものである。これから分かるように、米中心の作付け地域、トウモロコシ中心の作付け地域、ココナッツ中心の地域は、地図上でははっきりと塗り分けられる。つまり中部ルソン、北部ルソンの米、ミンダナオ島のトウモロコシ、ルソン島、ミンダナオ島、サマール島の海岸地域のココ

ナッツという具合に3大作物の作付け地域は分布している。次に平均農場面積をみてみよう。表2は、1971年の各プロビンスの農場面積を農家数で割って得た平均農場面積を大きい順に、並べたものである。この表から分かることは、

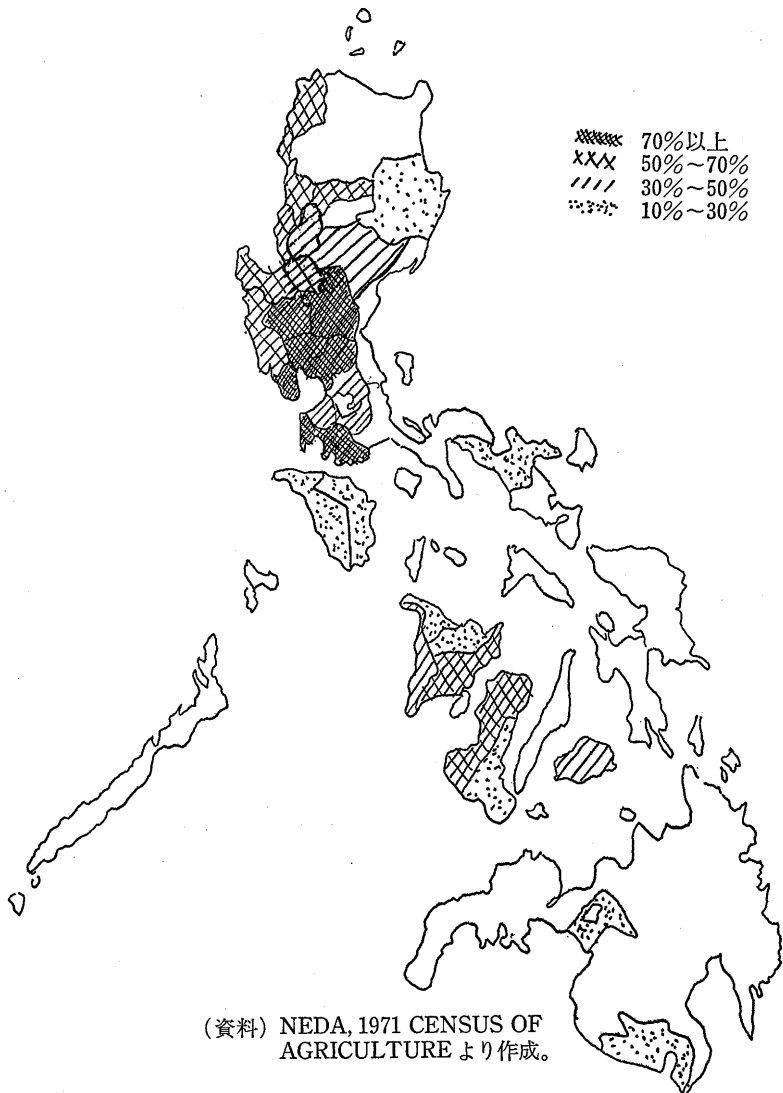


図2 肥料を使用した農家の割り合い (1971年)

例外を除き、米中心作付け地域は、概ね下位にランクされ、トウモロコシ中心作付け地域は、上位にランクされ、ココナッツ中心作付け地域ではこのような相関は見られない。図2は、同じく1971年の各プロビンスについて肥料を使用した延べ作付け面積を、総作付け面積で割った肥料の使用率の高さを基準に色分けしたものである。これからいえることは、米中心作付け地域は、上位にランクされ、トウモロコシ、ココナッツ中心の作付け地域はいずれも下位にランクされているということである。この図から、肥料の使用率50%以上の地域は、中部、北部ルソンの米中心の作付け地域と、サトウキビの作付け比率の高いネグロス・オシデンタル、イロイロに限定されており、他の地域の使用率は極めて低いことが分かる。以上を整理すると次のようになる。1971年の時点で、フィリピン農業を3大作物、米、トウモロコシ、ココナッツのいずれを中心に作付けているかによって3つの地域を特定することができる。米中心の作付け地域は、経営規模は零細であるが、集約度の高い地域という姿が描ける。対照的に、トウモロコシ中心の作付け地域は、経営規模は大きい<sup>2)</sup>、集約度の低い粗放的農業地域、ココナッツ中心の作付け地域は、経営規模は多岐にわたり、集約度は一般に低い農業地域と位置付けることができる。

以上、1971年フィリピン農業センサスをもとにして、フィリピンの3大作物地域を特定した。本来ならば、1981年センサスを用いて同様の地図を作り、70年代の3大作物地域の変化をみるべきであったが、1980年センサス第1巻では、多年性作物の栽培実面積が現れていないこと、第2巻では、米、トウモロコシの作付け面積が、シーズンごとに現れており、延べ作付け面積が推計できないこと、の資料上の制約から作成することができなかった。後ほど、本稿第3章の主要作物の作付け面積の変化で明らかにするように、3大作物地域には、70年代に相当作物構成が変化したプロビンスもあり、同様に3大作物地域以外のプロビンスでも作物構成を変えてきていることが推定され80年の3大作物地域の地図は、かなり塗り替えられる部分が出てきていると考えられる。

### 3. 主要作物の作付け面積の変化

表3は、フィリピンの主要8作物、米、トウモロコシ、タバコ、サトウ、ココナッツ、コーヒー、マニラ麻、バナナ、の1971年と1980年の延べ作付け面積の変化を示したものである<sup>3)</sup>。まず、全国の変化をみてみよう。第一に特徴的なことは、米、トウモロコシ、ココナッツ、コーヒー以外の作物は、面積が縮小していることである。さらに、トウモロコシの面積の伸びは、米、ココナッツ、コーヒーに比べると停滞的であり、米、トウモロコシ、コーヒーの3作物へ生産の特化傾向が読み取れる。第2に特徴的なことは、この3作物の面積の伸びを比較した場合、米の伸び率は、ココナッツ、コーヒーに比べてかなり低いということである。とうもろこしの停滞性は、70年代の米作における「緑の革命」による生産の拡大によって、米の代替食料としてのトウモロコシの意義が薄れ、食用トウモロコシの作付け面積が減少し、飼料用トウモロコシの伸びを相殺し、全体としては作付け面積の停滞につながったと考えられる。その他の商品作物については、国際価格、代替的な性格を持つ工業製品の出現、これに関連して、石油価格、主要輸出国との協定等の、影響を受け、生産量が変化したものと考えられる。顕著な伸びを示しているコーヒーは、スペイン統治時代には輸出用に生産されていたが、1894年の葉しぶ病の蔓延以降生産が休止していた。しかし、1970年代になって、世界市場におけるコーヒー価格の高騰の恩恵を受け、再びフィリピンの輸出品目の中に顔を出すようになった<sup>4)</sup>。マニラ麻については、安価な、化学繊維を原料とするロープの普及等によって、原料市場から締め出されていったと考えられる。砂糖については、フィリピンは、その主要な輸出国であるアメリカとの間で結ばれた割り当て制度であるラウレル・ラングレー協定が、1974年に失効し、それまでぬるま湯の中で、生産力の向上の努力を怠ってきたフィリピン糖業は、1974年以降生産力競争についていけなかったのである<sup>5)</sup>。これに対照的な動きをみせているのが、ココナッツである。70年代は、搾油プラントの輸入にたいする優遇措置、石油危機を契機としたココナッツオイル輸出価格の急騰を背景に、外国資本を含めた民間資

本がココナッツオイル工業に進出してきた。この状況にあわせて、ココナッツの生産が、70年代を通じて急速に拡大した<sup>6)</sup>。以上を総括すると、食料生産の、米生産への一本化、限られた商品作物への生産特化傾向を読み取ることができる。

では、このような全国的な動きは、どのような地域的特質を伴ってきたのであろうか。米作中心地域、トウモロコシ作中心地域、ココナッツ作中心地域の3地域についてみてみることにしよう。まず、米作中心地域についてみてみよう。この地域では、トウモロコシの作付け面積が、全国平均では、停滞しているのに対し、大幅に増加している。それに対してココナッツの作付け面積の減少が顕著である。米の収穫面積は、全国平均とほぼ同程度であり、停滞的な伸びを示しているといえる。次にトウモロコシ作中心地域を見てみよう。米の作付け面積は、わずかながら全国平均を上回っている。サトウキビ、バナナ、コーヒー等の全国的には停滞した伸びを示している作物における作付け面積の顕著な伸びが特徴的である。最後にココナッツの変化をみてみよう。一番大きな特徴は、ココナッツの面積が、全国平均を大幅に上回り増加していることである。この動きに対し、その他の作物の収穫面積は、トウモロコシを除き、全国平均を大幅に下回っている。ココナッツ生産への特化傾向が読み取れる。米、トウモロコシ、ココナッツ以外の作物別に、70年代の作付け面積の変化をみると、タバコ、ココナッツ、サトウキビの変化が、地域的な偏向を強く持っていることが分かる。

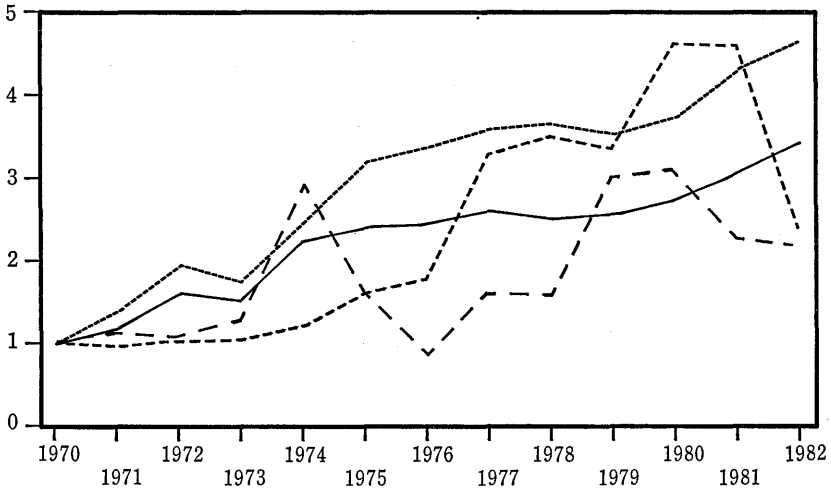
以上を、米作中心地域およびトウモロコシ作中心地域における中心作物の停滞・縮小傾向と作物構成の多様化およびココナッツ中心地域におけるココナッツ専業化と総括することができる。

次に、各地域の作物面積変化をプロビンスごとにもう少し詳しくみてみることにしよう。まず、米中心地域についてみよう。第一の特徴は、全てのプロビンスにおいて、トウモロコシの伸びが顕著であることである。第2の特徴は、米の伸びは、全国平均前後であり、停滞気味である。第3に、カリंगा・アパヤオ、マウンテン・プロビンスにおいては、米は縮小し、カリंगा・アパヤオでは、タバコ、コーヒー、トウモロコシ、ココナッツ、マウンテン・プロビン



スにおいてはトウモロコシ、コーヒー等の作物への作付け変化がみられる。第4に、カリंगा・アパヤオ、アブラにおいてタバコが大きな伸びを示していることである。トウモロコシ作中心地域の動きをみてみよう。第一の特徴は、ほとんどのプロビンスにおいて、トウモロコシが縮小ないし、停滞していることである。第2に、ココナッツ、コーヒー、特にコーヒーの伸びが著しいこと。第3に、米の伸びが、他地域に比べると高いということである。第4に、ブキンドン、ラナオ・デル・スル、ダバオ・デル・スルにおいて、サトウが際立った伸びを示していることである。最後に、ココナッツ中心地域についてみてみよう。第1に、全てのプロビンスにおいて、ココナッツが伸びている。この伸びは、米作中心地域における、米の伸びを上回っており、ココナッツへの特化傾向がさらに進んでいるということが出来る。第2に、ほとんどのプロビンスで、米が伸びており、特に、カミグイン、スルの伸びは著しい。第3に、上記の、カミグイン、スルにおいて、トウモロコシの伸びが際立っていることである。以上のプロビンス別の考察によって、以下のことが明かになる。全国的に縮小している作物も特定のプロビンスにおいては、顕著な伸びを示しており、衰退作物は特定プロビンスへの特化傾向を示している。成長作物であるココナッツは、ココナッツ作中心地域、トウモロコシ作中心地域での伸び、米作中心地域での縮小傾向がみられ、やはり地域的特化傾向が顕著である。トウモロコシの動きも非常に興味深い。食用としての白色トウモロコシの意義は米の増産の動きに対応して希薄化しているが、飼料用としてのトウモロコシの意義は、むしろ高まっているのである<sup>7)</sup>。トウモロコシを米の補助食糧としていた、ミンダナオ島においては<sup>8)</sup>、米の作付け面積と、生産の伸びに対応して、トウモロコシの作付け面積が減少したと考えられる。これに対して、元来から飼料用の黄色トウモロコシを栽培していたルソン島地域<sup>9)</sup>において、さらに作付け面積が伸びたものと考えられる。

ここで、3大作物、米、トウモロコシ、ココナッツと全国的に伸びてきているコーヒーの1970年から1982年の価格変化についてみてみよう。図3は、各作物の1971年の価格を1とした場合の、価格変化を示したものである。この図から分かるように、米、トウモロコシは安定した価格動向を示しているのに対し



—米 …トウモロコシ ---コーヒー --ココナッツ  
 (出所) NEDA, PHILIPPINE STATISTICAL YEARBOOK より作成。

図3 主要作物の価格変化 1970=1

て、ココナッツ、コーヒーは不安定な価格動向を示している。このことは、ココナッツや、コーヒーを生産する農家は常に価格の大きな変動にさらされているということであり、特に零細農は、このような状況に耐えていくことは困難である。このような性格を持つココナッツ、コーヒーの作付け面積の伸びは、零細経営の没落をもたらす可能性を強く持っているのである。ココナッツ生産への特化は、価格の暴落等を契機にして、地域農業に深刻な打撃をもたらす可能性を示している。この点は、次の経営規模の変化と大きな係わりをもっていると考えられる。

#### 4. 経営規模の変化

フィリピン農業センサスは、経営規模別の農家数、農場面積<sup>10)</sup>を示している。表4は、それをもとにして、1971年と1980年の農家数の増減数と増減率、表5は、農場面積の変化(ヘクタール)と変化率を示している。これらの表を参照し、70年代のフィリピン農業の経営規模がどのように変化したのかを考察することしよう。

まず、農家数の動向をみてみよう。全国的には、1ヘクタール未満の農家数と、1ヘクタールから3ヘクタール未満の農家数が最も増加しており、つぎに、5ヘクタールから10ヘクタール未満の農家数の増加が続いており、3ヘクタールから5ヘクタール、10ヘクタール以上の農家数の増加は小さい。つぎに、米、トウモロコシ、ココナッツ中心地域をみてみよう。全国の動向と同様の動きをみせているのが、トウモロコシ作中心地域と、ココナッツ作中心地域である。ココナッツ作中心地域では、10ヘクタール以上の農家数が絶対数で減少している点が、全国、トウモロコシ中心地域との違いである。最も特徴的な動向を示しているのが、米作中心地域である。この地域では、1ヘクタール未満、1ヘクタール以上3ヘクタール未満の農家数が大きく増加している点は共通しているが、3ヘクタール以上の階層のすべての農家数が減少しているのである。全国、トウモロコシ作中心地域、ココナッツ作中心地域では、10ヘクタール以上の大規模農の停滞、減少と、3ヘクタール以上5ヘクタール未満層を分解基軸とする農民層分解との結合形態がみられる。これに対して、米作中心地域では、1ヘクタール未満、1ヘクタール以上3ヘクタール未満層への集中現象がみられる。全国的に、共通して言えることは、1ヘクタール未満層の農家数が最も増加しており、零細農の割合が大きく増加していることである。

次に、それぞれの地域について、各プロビンスの動向をみてみよう。まず、トウモロコシ中心地域について考察しよう。この地域のプロビンスの大半は、トウモロコシ中心地域全体の動向とほぼ同じ動きをみせており、大規模農の停滞、減少、3ヘクタール以上5ヘクタール未満層を分解基軸とする農民層分解を示している。特徴的な動きをみせているのが、ダバオ・デル・ノルトとラナオ・デル・スルである。前者は、米作中心地域の動向のように、1ヘクタール未満、1ヘクタール以上3ヘクタール未満層への集中現象がみられる。ココナッツ地域でも、大半が、ココナッツ中心地域全体の動向と類似しているが、マリンドイク、ケソン、カミグイン、イースタン・サマールは、米作中心地域と類似した動向、スルは、中農標準化傾向を示している。最後に米作中心地域の動向をみてみよう。この地域の動向は、2種類に類型化される。一つは、地域動向と同様の傾向であり、もう一つは、10ヘクタール以上の大規模農と1ヘク

タール零細農へのはっきりとした農民層分解である。後者は、カリंगा・アパヤオ、パンガシナン、サンプレス、マウンテン・プロビンスである。

このような経営規模の動向は何を物語っているのであろうか。第一は、全国的な零細農の増加である。零細農の増加は、一面では「緑の革命」による米生産力の上昇が零細農の広範な存立を可能にしたと考えられるが、農外所得が十分でない場合には、農村の貧困化につながる。また、この状況が続けば、土地無し農業労働者の増加につながり、不安定な所得に依存する農村住民の割合が大きくなり、農村不安をもたらす可能性がある。第2は、トウモロコシ、ココナツ作中心地域における大規模農の停滞、減少、3ヘクタール以上5ヘクタール未満層を分解基軸とする農民層分解の意味である。大規模農の停滞については、大規模農が、何らかの形で集約農業を志向し、経営規模を縮小させていると考えられる。農民層分解については、競争に生き残った農家が土地の集中を行ってきたと考えられる。第3は、米作中心地域における2類型である。小、零細農への集中傾向は、農地改革の影響をあげることができる。農地改革の影響を危惧した地主が、相続等の際に土地の細分化を計ろうとすることは十分に考えられることである。下位階層からの上向も、農地改革の影響が大きいと考えられる。地主は、農地改革を避けるもう一つの方法として、対象作物である米、トウモロコシからその他の作物に転作することが考えられる。前章の作物別の作付け面積の変化と重ね合わせてみると（表3参照）、カリंगा・アパヤオのタバコやコーヒーの作付け面積の大きな伸び、マウンテン・プロビンスのコーヒーの作付け面積の大きな伸びはこのケースであると考えられる。

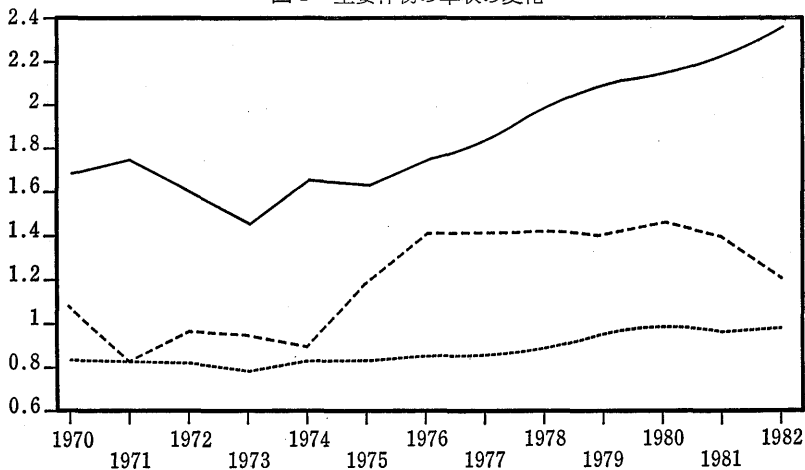
では、なぜトウモロコシ作中心地域は、トウモロコシが米と同様にマルコスポ政権下の農地改革の対象作物であったにもかかわらず、米作中心地域のような形で、農地の細分化や転作による農地改革の回避を反映した農民層の変化を示さなかったのであろうか。これには2つの要因が考えられる。一つは「緑の革命」の影響である。図4に示されている通り、70年代において米の単収は「緑の革命」の影響を受け相当のびたのにたいしてトウモロコシの単収は停滞的であった。米作中心地域の農民は生産力の上昇によってある程度の農地の零細化に耐えたのに対してトウモロコシ作中心地域の農民は耐ええなかったと考

えられる。もう一つは大統領令1942号の影響である。この法令は別の作物栽培地が奨励作物である トウモロコシなどの 栽培地に転換された場合は改革の対象とならないと規定している。つまりトウモロコシ栽培地においては大地所有者への土地集中の可能性すら残されているのである<sup>11)</sup>。

次に、農場面積の変化を考察しよう。全国、3大作物地域とも変化率を重ね合わせてみるとほぼ対応しているが、1ヘクタール未満の零細規模農家、10ヘクタール以上の大規模農家の動向においてずれがみられる。まず零細農家の農場面積の動向をみよう。全国、米、トウモロコシ作中心地域では、ほぼ農家数の増加率と対応しているが、ココナッツ作中心地域では、農場面積の増加率は、農家数の増加率を大きく下回っている。これは、ココナッツ作中心地域での農民層の没落を示しているといえる。前に考察したように、激しい価格変動等の外部的な不安定な条件に零細農家がついていけなかったものと考えられる。大規模農の農場面積は、全国、3大作物地域で共通している。つまり、農場面積の減少率は、農家数の減少率を大きく上回っている。やはり、この現象は米作、トウモロコシ地域での農地改革回避、ココナッツ作中心地域での集約化と関連しているものと考えられる。

(1000 t/ha)

図4 主要作物の単収の変化



— 米 --- トウモロコシ ... ココナッツ

(出所) 1987 PHILIPPINE STATISTICAL YEARBOOK より作成

## 5. 70年代の農業変化の意味

これまで、1971年の農業センサスと1980年農業センサスを使って、主に主要作物の作付け面積の変化、経営規模の変化をみてきた。主要作物の変化については、全国的には、ココナッツ、コーヒーが大きく伸びていること。その他の、商品作物は、減少していることが確認された。プロビンスごとの考察によって、ココナッツ中心地域において、ココナッツがさらに伸びていること、全国的には衰退している作物もごく限られたプロビンスにおいて大きく伸びていること、米中心地域においてトウモロコシが伸びており、トウモロコシ中心地域においてトウモロコシが減少ないし停滞していることである。ここで、興味深い動きを示したココナッツ、トウモロコシの2作物についてもっと詳しくみてみよう。

ココナッツは古くから、フィリピンの主要輸出品目であった。ここで、農業センサスに合わせてフィリピンの輸出におけるココナッツの重要性を整理しよう。ココナッツは、大きく分けて農家が外皮を取り除いて乾燥させただけのコプラ、工業部門で加工された、ココナッツ油、乾燥ココナッツという形で商品となる<sup>11)</sup>。表6から、コプラ、ココナッツ油、乾燥ココナッツの3品目の全輸出額に占める割合を算出すると、1971年が、11.7%、1980年が11.9%であり、特にココナッツ油は主要輸出品目であることが分かる。戦後から70年代までのココナッツ産業の大きな特徴は、少数のアメリカ系、華人系の企業によって、農民からのコプラの買いつけから加工まで支配されていたことである<sup>12)</sup>。また、上記のとおり、70年代は、外国資本が進出し、ココナッツ油の搾油工場が大幅に増え、搾油能力が急速に増加したのである。ココナッツ生産農家は、これらの外資系企業によって買いつけ価格、生産量が決定され、またこれらの価格、生産量は、石油価格の動向等の外的な条件に常に左右されており、非常に不安定な状況におかれているのである<sup>13)</sup>。

次に、トウモロコシについてみてみよう。上記の通り、トウモロコシは中部、南部においては、米の補助食糧として大きな意味をもっていたが、ルソン

では、古くから飼料用のトウモロコシが生産されていた。トウモロコシ生産は、1980年以降、米の自給と前後して飼料用作物としての黄色トウモロコシの増産が政策的に試みられている<sup>14)</sup>。ここで注目すべきことは、黄色トウモロコシ増産において、農業関連産業の役割に大きな期待がかけられていることである<sup>15)</sup>。農業関連産業がトウモロコシ生産に入り込んでくるということは、トウモロコシ農家にとって、コナツツの場合と同様、外的な不確定要因にさらされるということになる。トウモロコシは、農地改革の対象作物であるにもかかわらず、前述の大統領1942号により抜け穴も用意されており、土地集中につながる可能性を十分に持っているのである。

最後に、米作についてみてみよう。フィリピンの稲作においては70年代において2つの大きな変化が起こった。一つは、一般に「緑の革命」とよばれている多収量型稲品種の研究・開発と化学肥料、農業などの新投入財を多投する近代的栽培法の組み合わせによって、収量の拡大を計ろうとするものであった。もう一つは、1972年にマルコス大統領が行った農地改革である。マルコスは、1972年9月26日農地改革対象地域をフィリピン全土に拡大し、「家族」農場の確立をめざした。その具体的内容は、対象作物を米・トウモロコシに限定し、灌漑地については、3ヘクタール、非灌漑地については、5ヘクタール以上の農地が対象となり、地主の土地保有限度を7ヘクタールとすること。小作農は、まず地主・小作関係を確認し、地主から小作農への土地移転書(CLT)の受け渡し、地価の確定、土地銀行への地価年賦償還、この段階で農地改革が終了する<sup>17)</sup>。このような、「緑の革命」、農地改革がフィリピン稲作にどのような変化をもたらしたのだろうか。これまでの農業センサスの考察によって、米中心地域についての、作物変化、経営規模の変化を見てきたが、次にこの地域における、稲作の変化を、考察しよう。フィリピンにおける稲作は、作付け面積の点で、最も大きなシェアを占めており、農家数で見ると、それ以上の重要性をもっているのである。表7で示されているように、稲作農家は、全農家の40%以上を保っており、フィリピンの国民の福利にとって大きな意味をもっているのである。農業センサスでも米についての資料は、他の作物よりも詳細に示されている。ここで、前記の米作中心地域について、稲作の変化を考察しよ

う。表8は、米中心地域8プロビンスについて、人口、全農家数、全農場面積、米の総作付け面積、米の生産の1971年を100とした場合の1980年の値、高収量品種の導入率、トラクターを使用した農家の比率、1971年と1980年についての値、農地の保有以外、あるいは農外から大半の所得を得ている農家の比率の1971年の値を示したものである。ここで際立った特徴を示しているのは、ヌエバ・エシハとマウンテンプロビンスである。ヌエバ・エシハは、高収量品種の導入率、トラクターを使用した農家の割合が、他のプロビンスと比較して著しく高く、もっとも近代的農業の発達しているプロビンスと言える。また、表9、表10から分かるように、自作農家数の伸びが、やはり他のプロビンスと比較して大きく、農地改革の土地再配分の影響を最も強く受けたと考えられる。このように、ヌエバ・エシハは、フィリピン農業の70年代の大きな特徴である、「緑の革命」、農地改革の両者の影響を最も強く受けたプロビンスであり、多くの研究者がこのプロビンス内のバラングイの構造的変化について、ミクロの調査を行ってきた<sup>18)</sup>。これまで、フィリピンの「緑の革命」は米の増産の成功例としてもてはやされてきたが、このようにプロビンスごとの資料を検討すると、やはり高収量品種の導入による米の増産効果が確認される。例えば、大きな生産の伸びを示している、カリンガ・アパヤオやアブラでの高収量品種の導入率の伸びは著しい。

次に、マウンテンプロビンスについて考察しよう。マウンテンプロビンスの特徴は、他のプロビンスとは異なり、米の作付け面積が減少しており、トウモロコシ、コーヒーの作付け面積の伸びが著しいことである。人口は、増加しているのに対し、農家数は減少している。これは、必ずしもこのプロビンスにおける農業の衰退を示しているのではない。米の作付け面積は減少しているものの、全農場面積は、米中心地域の中でもかなり高い伸びを示しているのである。このプロビンスでは、先に経営規模のところで考察したように、零細農の増加、大土地所有者への土地集積と、零細農の没落が進行しており、プランテーション農業による小農経営の駆逐が進行しているものと考えられる。もう一つの特徴として、所得の源泉の大半を農地の保有以外、または農外所得としている農家が、他の米作中心地域と比べて高いことである。センサスのこの項目



からは、具体的にどのような形で所得を得ているのか明確ではないが、農外の雇用機会が、他のプロビンスに比べて大きいものと考えられる。零細農家が、土地の一部を手放し、それが大土地所有者のもとに集積したものと想定される。零細化した土地での生産活動から、十分な所得を得られない農民の多くは、農外所得、他者の農場での農業労働者として労働力を売らざるを得ないであろう。このように、米中心地域において、ほとんどのプロビンスでは、米作の強化が行われているのに対して、米作からプランテーション農業への転換が顕著な形で進んでいるプロビンスが存在するのである。このマウンテンプロビンスの経験は、今後、米作における高収量品種の導入がさらに進み、過剰米がでてくるような状況になれば、マウンテンプロビンスのように、プランテーション農業化、大土地所有者への土地集中という事態が進行する可能性があることを物語っている。

## 6. おわりに

以上、フィリピン農業の変化を1971年と1980年のフィリピン農業センサスを用いて、米中心地域、トウモロコシ中心地域、ココナツ中心地域について、主要作物の作付け面積の変化、経営規模の変化を中心に考察してきた。センサスの資料を中心に扱ったという制約から十分にフィリピン農業の1970年代の変化を眺望することができなかつた。特にここでは、筆者の今後の課題を明確にする意味で、2点について述べる。一点目は、土地無し農業労働者の問題である。フィリピン農業センサスの対象になっているのは、あくまでもなんらかの形で1,000平方メートルの耕地を所有するもしくはそれに準じた、家畜、牧草地を保有する「農家」であり、それ以下の規模の土地を所有する農民、土地無し農業労働者は、考慮の外におかれた。フィリピンにおける土地無し農業労働者は、数字の上から無視できない存在である。1975年の国政調査に基づけば、ヌエバ・エシハの土地無し農業労働者が、350万人を数え、全農業従事者の約47.5%に相当した。このような農業労働者は、70年代を通じて増加しており<sup>19)</sup>、農地改革と、「緑の革命」との相関関係についての研究が多くなされて

いる。土地無し農業労働者の問題は、プランテーション農業への移行とも大きく係わっており、今後明らかにしていかなければならない問題である。本稿で明らかにした全国的な零細農の増加傾向はこの問題と大きく係わっている。

第2点は、農民の所得の、平等化あるいは不平等化の問題である。本稿では、農民の所得の問題を取り上げることができなかったために、70年代にフィリピンの農民の生活が豊かになったのか、あるいは貧困化したのか、平等化したのか、不平等化したのかというような問題を取り扱うことができなかった。寺崎氏は、フィリピンの経済発展と所得分布についての論文<sup>20)</sup>の中で、フィリピンの農民の所得分布について、米作については60年代後半に、高収量品種の効果があらわれ、インフラの整った農家とそうでない農家との間に一時的な不平等が生じ、また、農地改革によって、対象外作物であるサトウキビ、ココナッツへの転作が進み、不平等化を招いていると結論づけている。本稿で明らかになったココナッツ、コーヒー等の特定作物の大きな伸び、衰退作物の特定地域への集中現象、ルソン島を中心としたトウモロコシ栽培の大きな伸びが農民の所得にどのような影響を与えたのか今後明らかにすべき問題として残された。トウモロコシ栽培の動向は注意すべきである。食用としての白色トウモロコシから飼料作物としての黄色トウモロコシへの移行、アグリビジネスの進出が今後のフィリピン農業に与える影響は小さくないであろう。

## 注

- 1) 「耕地面積」は、各作物が作付けされた農地の実測面積であり、「延べ作付け面積」は、その作物が1年間に作付けされた農地面積の合計である。
- 2) これは、一般にトウモロコシの作付け面積が、大きいことを示しているのではなく、ミンダナオ島という豊富な土地に恵まれた場所が、トウモロコシ作中心地域となっていることを示している。ちなみに、1980年農業センサスによれば、米の1戸当たり平均延べ作付け面積は、2.0ha.で、トウモロコシは、1.9ha.である。
- 3) フィリピンの行政単位は、大きい順にリージョン、プロビンス、バランガイとなっている。1971年から1980年にかけてリージョンは首都圏が新設された。本稿で米作中心地域に位置付けられたリサール、ブラカンのそれぞれ一部によって首都圏は構成されており、1971年と1980年の農業センサスを比較する上で不都合なためこの2プロビンスは考察の対象外とした。

表 1 作物別作付け面積 (%) 1971 年

	米	トウモロコシ	タバコ	サトウ	カモテ	ココナツ	アバカ	バナナ
フィリピン	31.2	24.1	0.8	3.4	1.4	22.4	1.0	2.5
インドネシア	75.1	15.6	3.4	0.2	0.5	0.9	0.0	0.9
アグサン・デル・ノルト	14.7	30.2	0.1	0.0	3.4	31.8	0.2	16.1
アグサン・デル・ノルト	21.4	51.4	0.1	0.2	3.4	8.0	4.4	7.5
アラバマ	51.3	2.9	0.0	0.1	0.5	33.6	1.8	4.4
アラバマ	35.3	10.7	0.0	1.0	3.7	35.4	6.7	2.6
アライゾナ	58.6	8.9	0.5	4.2	0.7	9.5	0.3	2.8
アラバマ	72.5	1.5	0.0	6.5	1.4	3.2	0.0	5.3
アラバマ	16.3	13.4	0.4	5.7	15.7	11.7	0.4	5.0
アラバマ	38.3	15.1	0.0	19.9	0.3	15.1	0.0	3.3
アラバマ	48.9	2.3	0.0	0.0	29.8	0.2	0.0	6.5
アラバマ	35.9	19.1	0.2	0.2	4.1	27.5	0.2	5.0
アラバマ	13.2	75.1	0.0	0.2	0.5	1.6	1.5	0.9
アラバマ	95.7	0.5	0.0	0.4	0.2	0.1	0.0	0.3
アラバマ	61.4	26.0	5.7	0.1	0.2	2.1	0.0	1.0
アラバマ	16.7	1.3	0.0	0.5	2.3	67.1	0.9	5.6
アラバマ	41.9	8.6	0.0	0.5	3.8	36.3	1.9	3.5
アラバマ	5.3	0.5	0.0	0.0	1.6	83.8	0.2	3.8
アラバマ	65.9	6.3	0.0	15.1	0.7	6.9	0.0	1.7
アラバマ	23.2	3.8	0.0	0.2	15.0	24.6	25.6	3.7
アラバマ	38.7	4.7	0.0	3.0	0.6	14.8	0.0	12.9
アラバマ	2.4	70.2	0.8	2.6	1.6	15.3	0.0	1.5
アラバマ	36.5	46.7	0.5	0.1	0.3	11.8	0.1	0.9
アラバマ	12.8	48.8	0.1	0.0	0.6	27.3	1.7	3.4
アラバマ	9.4	53.5	0.0	0.2	0.4	28.0	0.2	2.9
アラバマ	6.1	31.9	0.0	0.0	0.4	55.4	0.9	1.2
アラバマ	26.0	0.3	0.0	0.0	3.0	60.7	1.0	5.1
アラバマ	48.7	16.9	0.3	0.0	18.0	0.4	0.0	3.5
アラバマ	72.2	6.6	7.0	2.6	0.7	1.6	0.0	1.2
アラバマ	64.4	7.4	17.8	1.3	1.8	1.0	0.0	1.1
アラバマ	62.4	6.8	0.4	12.5	0.6	6.0	0.1	2.1
アラバマ	57.0	26.9	10.1	0.1	0.1	0.4	0.0	1.5
アラバマ	80.2	7.3	0.5	0.4	0.7	1.3	0.0	1.4
アラバマ	68.6	2.0	15.9	1.2	1.4	1.6	0.0	2.1
アラバマ	42.8	1.2	0.0	8.8	0.6	36.5	0.0	3.5
アラバマ	14.9	53.7	0.1	0.0	0.8	25.2	0.0	2.9
アラバマ	37.0	31.3	0.0	0.0	0.4	15.3	1.9	0.6
アラバマ	28.6	20.8	0.2	4.8	2.4	34.7	2.8	2.0
アラバマ	28.2	3.6	0.1	0.0	1.2	60.8	0.1	2.4
アラバマ	13.4	43.4	0.3	0.1	2.4	35.5	0.0	1.2
アラバマ	12.8	20.7	0.0	0.0	1.5	58.2	0.2	4.2
アラバマ	3.4	40.7	1.4	0.0	1.5	35.5	0.7	5.9
アラバマ	72.6	3.5	1.5	0.9	11.0	0.4	0.0	2.4
アラバマ	17.7	20.1	0.1	49.1	0.6	6.8	0.8	1.9
アラバマ	9.1	52.5	0.6	11.2	1.1	18.6	0.3	2.2
アラバマ	23.5	1.5	0.0	0.0	4.3	56.2	6.3	4.3
アラバマ	94.3	1.6	0.3	0.1	0.1	0.0	0.0	0.1
アラバマ	66.6	14.9	1.7	0.1	5.0	0.7	0.0	4.1
アラバマ	76.1	8.9	3.7	0.0	0.6	5.4	0.0	1.7
アラバマ	49.6	10.7	0.0	0.0	0.6	27.6	0.2	6.5
アラバマ	42.7	4.9	0.0	0.1	1.5	38.1	0.0	5.6
アラバマ	70.5	0.8	0.0	25.1	0.2	0.0	0.0	0.2
アラバマ	76.6	4.9	3.7	1.4	0.3	2.5	0.0	1.0
アラバマ	24.7	5.6	0.0	0.1	0.6	62.2	0.0	3.9
アラバマ	75.5	4.2	0.0	0.0	1.1	4.0	0.0	2.8
アラバマ	23.1	7.5	0.1	0.0	1.3	59.2	0.0	4.8
アラバマ	25.3	18.9	0.2	0.2	4.9	35.7	2.2	4.1
アラバマ	23.3	2.3	0.0	0.0	2.1	55.8	9.7	2.4
アラバマ	19.9	59.3	0.2	0.1	0.2	16.7	0.1	0.8
アラバマ	15.6	2.0	0.0	0.1	4.6	54.7	9.7	6.1
アラバマ	12.5	0.7	0.1	0.2	0.3	69.6	3.4	1.7
アラバマ	19.7	1.5	0.0	0.0	5.4	60.9	0.1	5.6
アラバマ	23.3	11.8	0.1	0.1	3.9	45.9	3.2	7.3
アラバマ	82.6	0.3	0.2	9.5	1.6	0.2	0.0	0.3
アラバマ	76.1	0.6	0.0	9.5	1.1	3.9	0.0	1.1
アラバマ	12.7	33.7	0.1	0.1	1.4	46.3	0.3	2.4
アラバマ	21.1	40.4	0.9	0.1	0.8	30.7	0.2	2.3

(出所) NEDA, 1971 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表2 平均農場面積 1971年

(注) (米) 米作中心地域

(ト) トウモロコシ作中心地域

(コ) ココナツ作中心地域

プロビンス		農 家 数 戸	農 場 面 積 ha.	一戸当り平均農場面積 ha./戸
		2,354,469	8,493,735	3.6
(コ)	フネカバダ	40,635	324,747	8.0
	グマリン	15,007	101,815	6.8
	イロリン	24,384	151,393	6.2
(米)	バダオ	22,044	131,533	6.0
(ト)	ダバオ	13,972	80,868	5.8
(ト)	ダバオ	19,401	111,558	5.8
	ダバオ	43,224	217,699	5.4
(ト)	ダバオ	44,218	234,386	5.4
(ト)	ダバオ	49,152	238,171	5.4
(コ)	ダバオ	26,798	141,824	5.3
(米)	ダバオ	21,734	108,526	5.0
(米)	ダバオ	28,422	134,901	4.7
(ト)	ダバオ	66,301	313,432	4.7
(コ)	ダバオ	120,316	567,877	4.7
(ト)	ダバオ	23,707	103,791	4.4
(コ)	ダバオ	42,617	184,050	4.3
(ト)	ダバオ	88,929	368,818	4.1
	ダバオ	8,176	33,430	4.1
(ト)	ダバオ	51,172	202,179	4.0
	ダバオ	74,166	292,795	3.9
	ダバオ	33,196	129,207	3.9
	ダバオ	23,391	90,645	3.9
(コ)	ダバオ	53,389	202,731	3.8
(米)	ダバオ	20,909	79,035	3.8
(米)	ダバオ	23,841	90,115	3.8
	ダバオ	1,447	5,438	3.8
(ト)	ダバオ	21,889	82,040	3.7
(コ)	ダバオ	28,647	106,722	3.7
(ト)	ダバオ	12,205	43,518	3.6
(ト)	ダバオ	16,324	57,624	3.6
(米)	ダバオ	28,914	101,614	3.5
	ダバオ	60,097	208,488	3.5
	ダバオ	69,704	235,356	3.4
	ダバオ	16,230	54,470	3.4
	ダバオ	13,567	45,398	3.3
	ダバオ	42,415	141,655	3.3
(ト)	ダバオ	75,464	248,366	3.3
(コ)	ダバオ	58,208	188,251	3.3
(ト)	ダバオ	24,011	75,137	3.1
(米)	ダバオ	30,889	96,043	3.1
(米)	ダバオ	16,921	52,382	3.1
(米)	ダバオ	35,596	109,302	3.1
	ダバオ	37,080	112,080	3.0
	ダバオ	12,315	36,093	2.9
	ダバオ	20,287	58,913	2.9
	ダバオ	89,236	257,068	2.9
(コ)	ダバオ	45,740	131,085	2.9
	ダバオ	3,291	9,403	2.9
	ダバオ	19,080	53,329	2.9
(コ)	ダバオ	12,504	33,648	2.7
(コ)	ダバオ	10,310	26,525	2.6
(コ)	ダバオ	23,326	59,372	2.5
(コ)	ダバオ	21,359	53,986	2.5
(コ)	ダバオ	8,540	21,581	2.5
(米)	ダバオ	58,140	137,845	2.4
(米)	ダバオ	61,107	142,070	2.3
(コ)	ダバオ	28,694	65,085	2.3
(コ)	ダバオ	26,611	53,695	2.0
(米)	ダバオ	89,305	173,325	1.9
(米)	ダバオ	14,085	23,833	1.7
(米)	ダバオ	13,405	22,616	1.7
	ダバオ	27,671	41,205	1.5
(ト)	ダバオ	27,285	40,389	1.5
	ダバオ	102,427	148,812	1.5
	ダバオ	31,047	42,280	1.4

(出所) NEDA, 1971 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表3 1971年・1988年の主要作物の作付面積の変化 1971 = 100

	プロビンス	米	トウモロコシ	タバコ	サトウ	ココナツ	コーヒー	アバカ	バナナ
米作中心地域	ヌエバ・エシハ	123	152	41	90	158	—	—	61
	ターラック	132	534	166	78	37	—	—	48
	カリガアバヤオ	99	194	335	48	143	321	—	294
	バンガシナン	128	216	91	57	57	80	—	56
	オシデンタル・ミンドロ	113	156	37	20	69	—	—	140
	ザンブレス	106	116	—	8	25	—	—	79
	アブラ	123	142	343	328	25	101	—	78
マウンテン・プロビンス	47	217	44	56	66	216	—	18	
トウモロコシ作中心地域	ブキンドン	156	120	163	2,148	118	269	56	82
	セブ	133	128	59	95	144	57	193	93
	サウスコタバト	114	114	14	33	102	2,466	77	123
	ラウナ・デル・スル	108	121	29	1,000	81	129	37	56
	ダバオ・デル・スル	160	96	151	1,150	175	165	236	71
	ネグロス・オリエンタル	120	134	211	65	128	278	49	84
	アグサン・デル・スル	224	122	23	20	136	336	—	62
	ダバオ・デル・ノルト	230	88	11	56	143	221	54	265
コタバト	111	91	57	1,310	114	179	90	91	
マサバテ	137	83	87	37	176	8	47	46	
ココナツ作中心地域	カミグイン	215	634	—	—	123	245	68	154
	カマリネス・ノルト	101	61	—	23	136	12	15	22
	スル	143	710	47	250	160	68	81	78
	ケソン	114	152	37	1	216	129	—	75
	スリギオ・デル・ノルト	129	159	50	182	131	450	44	78
	マリンディク	93	87	61	7	118	2	16	40
	イースタン・サマール	70	38	—	74	112	—	8	11
	ロンブロン	134	89	396	—	190	—	—	8
	ミサミス・オシデンタル	112	98	100	44	127	141	9	44
ノーザン・サマール	102	58	87	33	127	70	37	26	
フィリピン	123	108	87	92	140	173	87	74	

(出所) NEDA, 1971 CENSUS OF AGRICULTURE, NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表4 経営規模別農家数の変化 71年—80年

	全農家 1980-1971 /1971		1.00 ha. 未満 1980-1971 /1971		1.00 ha. 以上、 3.00 ha. 未満 1980-1971 /1971		3.00 ha. 以上、 5.00 ha. 未満 1980-1971 /1971		5.00 ha. 以上、 10.00 ha. 未満 1980-1971 /1971		10.00 ha. 以上 1980-1971 /1971	
フィリピン	1,065,854	31.2%	456,428	58.8%	460,463	29.2%	29,804	5.1%	116,159	32.3%	3,000	2.5%
ヌエバ・エシハ	26,625	30.7%	10,254	85.1%	22,330	42.4%	- 3,703	- 20.7%	- 2,028	- 55.7%	- 228	- 43.0%
ターラック	16,256	31.4%	8,772	76.7%	11,363	38.1%	- 2,122	- 25.7%	- 1,513	- 73.4%	- 244	- 85.6%
カリンガ・アバヤオ	9,062	24.9%	3,769	60.3%	2,884	24.6%	312	7.1%	1,601	58.1%	498	56.4%
パンガシナン	33,393	27.2%	27,117	58.5%	9,598	15.2%	- 3,751	- 41.0%	325	10.2%	104	14.9%
オシデンタル・ミンドロ	5,539	28.4%	1,126	69.2%	4,883	44.4%	213	4.7%	- 278	- 16.9%	- 405	- 57.0%
ザンプレス	3,522	22.0%	3,282	49.0%	958	12.2%	- 612	- 65.3%	- 117	- 34.1%	11	5.1%
アブラ	7,173	34.9%	5,326	48.4%	1,541	20.2%	232	15.7%	103	26.2%	- 29	- 53.7%
マウンテン・プロビンス	- 3,095	- 28.2%	1,765	24.2%	- 4,528	- 238.7%	- 730	- 81.3%	201	32.8%	197	69.1%
米作中心地域	98,475	27.8%	61,411	59.8%	49,029	26.4%	- 10,161	- 21.4%	- 1,706	- 11.7%	- 98	- 2.7%
ブキンドン	25,741	34.4%	3,496	67.6%	11,665	38.2%	1,651	10.2%	8,053	45.5%	876	16.5%
セブ	47,059	31.5%	37,025	43.0%	8,396	16.0%	190	2.7%	1,083	36.4%	365	36.9%
サウス・コタバト	17,577	28.4%	2,722	68.7%	13,279	43.0%	- 802	- 6.0%	2,864	28.3%	- 486	- 14.5%
ラナオ・デル・スル	7,656	15.3%	216	20.5%	4,152	16.4%	2,747	15.6%	1,712	27.8%	- 541	- 104.0%
ダバオ・デル・スル	28,163	35.5%	4,520	54.3%	13,789	38.4%	2,724	15.9%	5,763	42.5%	1,367	30.8%
ネグロス・オリエンタル	33,728	36.7%	16,471	53.4%	10,291	26.0%	3,159	27.9%	3,340	47.5%	467	15.2%
アグサン・デル・スル	9,768	33.5%	768	80.2%	3,956	43.4%	977	13.1%	3,602	43.7%	465	13.6%
ダバオ・デル・ノルト	34,020	46.0%	5,161	73.2%	14,703	49.4%	7,995	42.3%	6,429	45.7%	- 268	- 6.4%
コタバト	44,029	26.8%	7,395	75.9%	30,016	39.0%	- 2,072	- 5.0%	9,812	32.4%	- 1,122	- 18.0%
マサバテ	19,935	31.6%	4,835	68.0%	10,740	35.2%	- 523	- 4.2%	3,820	43.1%	1,063	24.7%
トウモロコシ作中心地域	267,676	31.9%	82,609	51.5%	120,987	33.5%	16,046	9.9%	46,478	39.1%	2,186	6.1%
カミグイン	3,520	51.7%	2,293	80.7%	1,045	39.4%	165	19.2%	47	12.7%	- 30	- 34.9%
カマリネス・ノルト	4,772	24.1%	1,495	73.1%	1,683	31.3%	379	9.0%	1,486	28.8%	- 271	- 9.1%
スーラル	12,107	36.7%	- 384	- 69.7%	2,433	24.5%	5,076	38.3%	5,221	61.1%	- 239	- 32.8%
ケソン	34,815	34.4%	7,393	67.1%	14,246	36.6%	7,817	29.8%	6,188	32.4%	- 874	- 15.1%
スリガオ・デル・ノルト	16,430	42.9%	4,588	84.7%	8,914	48.7%	1,376	15.4%	1,810	38.5%	- 258	- 27.2%
マリナディク	4,190	25.6%	1,919	58.6%	1,602	21.8%	976	24.1%	- 225	- 18.2%	- 82	- 16.5%
イースタン・サマール	5,721	19.4%	2,136	58.8%	3,780	28.7%	543	7.0%	89	2.3%	- 827	- 78.8%
ロソンブロン	10,244	43.0%	2,827	70.1%	5,237	40.5%	1,492	32.5%	695	40.3%	- 7	- 1.3%
ミサミス・オンデンタル	11,463	32.3%	4,278	60.6%	5,422	32.3%	471	7.1%	1,151	28.5%	141	14.0%
ノーザン・サマール	8,212	23.5%	1,149	63.0%	5,120	36.5%	- 139	- 1.6%	2,356	32.6%	- 283	- 9.2%
ココナッツ作中心地域	111,474	32.9%	27,694	66.4%	49,482	35.5%	18,156	21.3%	18,818	33.7%	- 2,730	- 16.4%

(出所) NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表5 経営規模別農場面積の変化 71年-80年

単位：ヘクタール

	全農家 1980-1971 /1971		1.00 ha.未満 1980-1971 /1971		1.00 ha.以上 3.00 ha.未満 1980-1971 /1971		3.00 ha.以上 5.00 ha.未満 1980-1971 /1971		5.00 ha.以上 10.00 ha.未満 1980-1971 /1971		10.00 ha.以上 1980-1971 /1971	
フィリピン	12,315	14.5%	2,069	127.6%	6,345	33.6%	534	2.7%	6,895	44.4%	-3,529	-12.3%
ヌエバ・エシハ ターラック	-203	-9.7%	53	588.9%	301	52.4%	-152	-20.2%	-126	-37.0%	-279	-68.6%
カリンガ・アバヤオ	-85	-7.8%	40	285.7%	157	47.0%	-86	-22.7%	-96	-44.2%	-100	-65.4%
パンガシナン	291	55.5%	17	130.8%	36	23.7%	5	3.4%	100	137.0%	133	97.1%
オシデンタル・ミンドロ	124	7.2%	129	124.0%	87	10.0%	-136	-29.8%	18	10.2%	25	20.0%
ザンブレス	-32	-4.0%	5	166.7%	76	71.0%	4	2.6%	-23	-18.5%	-96	-22.6%
アブラ	-44	-13.1%	15	75.0%	7	6.3%	-23	-41.1%	-8	-27.6%	-35	-29.4%
マウンテン・プロビンス	57	25.2%	26	89.7%	24	24.5%	10	21.7%	6	33.3%	-8	-23.5%
	41	17.2%	-6	-22.2%	-78	-71.6%	-27	-45.0%	13	50.0%	137	805.9%
米作中心地域	149	2.1%	279	127.4%	610	25.9%	-404	-19.7%	-116	-11.6%	-223	-15.7%
ベキンドン	821	31.4%	16	228.6%	167	51.9%	46	8.9%	485	77.7%	107	9.3%
セブ	291	19.6%	144	61.0%	87	13.1%	-1	-0.4%	68	58.6%	-7	-3.2%
サウス・コタバト	93	3.9%	14	280.0%	185	58.9%	-44	-8.5%	142	29.8%	-204	-19.1%
ラナオ・デル・スル	100	7.0%	3	75.0%	101	28.5%	95	18.2%	93	33.5%	-192	-73.8%
ダバオ・デル・スル	904	44.7%	25	156.3%	206	55.4%	85	16.5%	347	71.5%	241	38.0%
ネグロス・オリエンタル	574	30.5%	66	90.4%	141	31.1%	102	34.6%	200	85.1%	65	7.9%
アグサン・デル・スル	315	28.2%	4	400.0%	63	66.3%	21	8.9%	217	73.3%	12	2.5%
ダバオ・デル・ノルト	682	31.3%	24	240.0%	213	81.9%	237	72.1%	364	72.8%	-206	-20.4%
コタバト	-169	-3.0%	40	363.6%	457	54.1%	-146	-9.2%	513	41.4%	-1,030	-51.4%
マサパテ	404	17.2%	23	230.0%	157	47.3%	-39	-8.4%	236	72.6%	26	2.1%
トウモロコン作中心地域	4,015	17.4%	359	96.2%	1,777	44.3%	406	7.7%	2,665	58.3%	-1,188	-13.4%
カミグイン	31	33.0%	0	0.0%	15	55.6%	7	28.0%	4	19.0%	-5	-26.3%
カマリネス・ノルト	95	9.3%	7	233.3%	28	43.1%	13	9.2%	99	39.9%	-53	-9.4%
スール	480	60.8%	-2	-50.0%	56	44.8%	161	54.2%	305	152.5%	-42	-25.5%
ケソン	641	20.4%	35	184.2%	212	49.2%	265	39.1%	374	44.2%	-244	-21.0%
スリガオ・デル・ノルト	258	31.5%	3	75.0%	140	87.0%	38	13.8%	106	56.1%	-49	-25.7%
マリンダイク	11	2.5%	-1	-14.3%	21	21.2%	32	28.3%	-86	-90.5%	-35	-28.9%
イースタン・サマール	-109	-10.5%	9	128.6%	63	38.0%	12	4.5%	2	0.8%	-194	-54.0%
ロンブロン	182	40.1%	-6	-85.7%	89	71.2%	51	45.9%	43	64.2%	-15	-10.3%
ミサミス・オシデンタル	441	34.1%	13	76.5%	145	54.5%	83	27.9%	167	61.4%	33	7.5%
ノザン・サマール	135	9.5%	4	100.0%	79	47.9%	-18	-5.3%	149	46.1%	-79	-13.4%
ココナッツ作中心地域	2,165	20.6%	62	82.7%	848	52.0%	644	25.4%	1,163	46.5%	-683	-18.2%

(出所) NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表6 主要産品の輸出額の推移 1971 - 81

(千ドル, FOB)

産品(1)	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981
総輸出額(2)	1,189,247	1,168,433	1,837,188	2,724,989	2,294,470	2,573,676	3,150,887	3,424,876	4,601,190	5,787,788	5,722,157
上位10産品の輸出額	881,593	861,869	1,378,060a	2,093,038a	1,586,080	1,573,776	1,884,745	1,779,325	2,271,343	2,728,728	2,395,569
砂糖	220,124	210,552	273,966	737,365	580,736	426,522	511,708	196,903	211,553	624,034	566,560
ココモツ油	102,016	82,826	151,083	380,021	225,795	294,839	412,238	620,572	742,513	566,848	533,466
鉄精鉱	153,128	174,635	290,281	393,184	212,081	265,879	267,800	250,387	440,360	544,974	429,376
金	11,453b	-	25,110b	53,104	53,251	48,921	58,729	75,738	103,280	239,149	215,183
材木	10,650b	14,786b	35,117	30,068b	27,229b	68,195	66,682	85,190	198,345	181,286	125,725
バナナ	15,389	24,580	27,831	45,479	73,104	75,618	72,461	84,127	96,685	114,184	124,024
合板	24,115	34,140	58,057	26,089	20,602b	43,165b	40,589b	71,970b	107,183	110,618	110,741
乾燥ココナツ	21,723	18,930	32,456	60,300	30,429b	37,494b	90,047	81,888	107,001	116,991	101,788
凍冷まぐろ(切身を除く)	18b	22b	207b	421b	212b	-	13,296b	19,377b	34,438b	68,326b	100,320
バナナプル(シロップつけ)	25,340	22,880	19,696b	30,625	34,705	46,739b	55,908b	59,766b	73,756b	82,098b	88,386
未加工ニッケル	-	-	-	-	29,609	54,335c	70,721c	50,160	79,036	113,419c	88,156
コブラ油ケーキ/ミール	15,942c	17,470c	22,785	27,887	33,331c	54,523c	58,151	69,059	85,519	81,391	80,758
丸太	196,043c	157,339c	303,564c	215,643c	166,881c	135,222c	133,834c	144,869c	144,407c	91,921	76,287
ニッケル精鉱	309	1,313	1,586	1,468	154	-	12,149	11,397	-	57,827	52,475
ズボン, 綿衣類等	27	136	1,080	5,039	8,777	18,746	23,978	23,820	29,461	43,695	48,208
コーヒー豆(生)	2,162	107	50	7	2,583	24,676	44,618	33,526	43,780	44,576	39,376
糖みつ	12,073	10,826	18,866	27,671	33,878	24,410	20,459	16,045	26,890	32,868	37,830
コブラ	107,773c	118,717c	165,764c	139,784c	172,318c	149,722c	200,525c	135,684c	89,128	47,253	33,634
ベニヤ	9,087	17,546	18,471	18,634	8,115	17,882	20,074	22,278	34,590	35,684	31,336
クロム鉱石	6,037	6,194	9,179	12,569	12,819	14,836	25,098	24,592	22,631	33,164	25,307
うるち米	4	1,295	1,300	-	11	-	4,200	14,451	46,380	73,179	23,463
セメント	8,258	6,380	17,261	26,644	26,140	18,188	23,516	25,736	12,677	35,747	21,276
鉄鉱石	8,342	8,298	16,736	11,537	11,905	-	57,047	103,967c	120,016c	118,225c	56,780d

(注) (1) 1981年の順位

(2) 国内の輸出額と再輸出額の合計

a は, 39,941千ドルの金塊(1973)並びに37,533千ドルのアバカ繊維(1974)の輸出額を含む。ただし, これらはこの表には掲載されていない。

b は, 上位10産品に含まれていないもの。

c は, その年の上位10産品に含まれているもの。

d については, 1月~6月までの期間のみ。

(出所) 『フィリピン農業』国際農林業協力協会1987年, 210頁。



表 7 種類別農家数

	全農家数	稲作農家	トウモロコシ農家	ココナツ農家	そ の 他
1939年	1,634,726	799,666	239,618	302,294	293,148
	100.0%	48.9%	14.7%	18.5%	17.9%
1960年	2,116,212	1,041,882	378,803	440,252	255,275
	100.0%	49.2%	17.9%	20.8%	12.1%
1971年	2,354,469	981,915	514,175	432,486	425,893
	100.0%	41.7%	21.8%	18.4%	18.1%
1980年	3,420,323	1,610,529	753,632	709,626	346,536
	100.0%	47.1%	22.0%	20.7%	10.1%

(出所) NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE, 1981と鈴木忠和「フィリピンの農業と稲作」(川野重任編『アジアの食糧生産』, 1985年, 200頁より作成。

表8 1971年, 1980年の米作中心地域の農業変化

1971 = 100

プロビンス	人口	全農家数	全農場面積	米作付面積	米生産	高収量品種の導入率		トラクター使用農家率		所得の大半を農地の保有以外・農外から得えている農家数の割合1971
						1971	1980	1971	1980	
ヌエバ・エシハ	131	144	115	132	200	53	97	22	48	2.0
ターラック	126	146	91	99	112	79	66	22	9	1.2
カリガアバヤオ	136	154	92	128	210	14	44	1	4	3.0
バンガシナン	118	137	156	129	134	46	51	11	19	3.7
オシデンタル・ミンドロ	154	140	107	113	177	39	90	3	10	4.3
ザンブレス	129	128	96	106	121	39	77	3	20	6.0
アブラ	110	154	87	123	220	5	16	0	0	1.6
マウンテン・プロビンス	111	88	125	47	48	5	12	0	0	11.9
フィリピン	131	145	117	123	188	34	61	4	9	5.0

(出所) NEDA, 1971 CENSUS OF AGRICULTURE, NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE, NEDA, 1970 CENSUS OF POPULATION, NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

注 10)

土地利用の変化

	総農場面積		耕 地						永年性作物		牧草地, 牧場		森 林		そ の 他	
			合 計		一年性作物		休 耕 地									
	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980		
フィリピン	84,937	97,252	46,443	52,037	38,920	43,652	7,523	8,385	25,322	34,890	6,910	5,300	4,337	3,365	1,926	1,659
	100.0%	100.0%	54.7%	53.5%	45.8%	44.9%	8.9%	8.6%	29.8%	35.9%	8.1%	5.4%	5.1%	3.5%	2.3%	1.7%

表9 土地所形態の変化（農家数%）

プロビンス	全 農 家		自 作		自 小 作		小 作		そ の 他	
	1970	1980	1970	1980	1970	1980	1970	1980	1970	1980
フ ィ リ ピ ン	100.0%	100.0%	58.8%	58.3%	11.4%	10.7%	26.5%	25.5%	4.1%	5.5%
ヌ エ バ ・ エ シ ハ	100.0%	100.0%	15.1%	51.3%	15.0%	7.0%	58.1%	37.6%	11.8%	4.2%
タ ー ラ ッ ク	100.0%	100.0%	19.7%	53.7%	22.4%	11.8%	48.1%	31.1%	9.8%	3.4%
カ リ ン ガ ・ ア パ ヤ オ	100.0%	100.0%	78.9%	88.1%	6.8%	2.4%	10.5%	8.0%	3.8%	1.5%
パ ン ガ シ ナ ン	100.0%	100.0%	34.8%	50.7%	22.3%	17.9%	37.6%	28.5%	5.2%	2.9%
オ シ デ ン タ ル ・ ミ ン ド ロ	100.0%	100.0%	53.5%	62.7%	9.7%	7.4%	34.2%	26.0%	2.6%	3.9%
ザ ン ブ レ ス	100.0%	100.0%	32.2%	38.3%	17.5%	12.8%	45.2%	42.3%	5.1%	6.7%
ア ブ ラ	100.0%	100.0%	57.9%	56.4%	29.4%	26.7%	11.7%	11.5%	1.0%	5.4%
マ ウ ン テ ン ・ プ ロ ビ ンス	100.0%	100.0%	93.6%	89.6%	4.4%	10.3%	0.2%	0.9%	1.8%	2.4%

(出所) NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

表10 土地所有形態の変化（農場面積%）

プロビンス	全 農 家		自 作		自 小 作		小 作		そ の 他	
	1970	1980	1970	1980	1970	1980	1970	1980	1970	1980
フ ィ リ ピ ン	100.0%	100.0%	62.9%	66.8%	11.0%	10.1%	18.2%	18.6%	7.9%	4.5%
ヌ エ バ ・ エ シ ハ	100.0%	100.0%	17.4%	52.3%	16.0%	9.6%	50.3%	34.2%	16.3%	3.9%
タ ー ラ ッ ク	100.0%	100.0%	21.1%	56.0%	22.9%	15.3%	45.7%	26.5%	10.3%	2.3%
カ リ ン ガ ・ ア パ ヤ オ	100.0%	100.0%	82.6%	91.4%	8.0%	2.1%	6.3%	3.6%	3.2%	2.9%
パ ン ガ シ ナ ン	100.0%	100.0%	33.9%	49.9%	27.1%	22.8%	33.1%	24.8%	6.0%	2.5%
オ シ デ ン タ ル ・ ミ ン ド ロ	100.0%	100.0%	58.6%	76.1%	10.6%	8.4%	17.6%	13.1%	13.2%	2.6%
ザ ン ブ レ ス	100.0%	100.0%	47.9%	49.7%	18.8%	12.7%	27.7%	29.1%	5.7%	8.6%
ア ブ ラ	100.0%	100.0%	60.2%	61.1%	29.6%	25.8%	9.3%	7.8%	1.3%	5.3%
マ ウ ン テ ン ・ プ ロ ビ ンス	100.0%	100.0%	95.4%	95.3%	3.4%	1.8%	0.0%	0.0%	1.3%	2.2%

(出所) NEDA, 1980 CENSUS OF AGRICULTURE より作成。

- 4) Rene E. Ofreneo, *Capitalism in Philippine Agriculture*, 1980, pp. 120-121.
- 5) 永野善子『砂糖アシエンダと貧困』勁草書房, 1990年, 198-199ページ。
- 6) 森沢恵子「フィリピンにおける農業関連工業の展開——70年代以降におけるココナツオイル工業の新展開——」(大阪市立大学『季刊経済研究』第6巻, 3号, 1983年) 31ページ。
- 7) 梅原弘光「フィリピンにおけるトウモロコシ生産の展開——農業関連産業と農民の組織化——」(梅原弘光編『東南アジア農業の商業化』アジア経済研究所, 1989年) 207-210ページ。
- 8) 同上, 209ページ。
- 9) 同上, 208ページ。
- 10) 「農場面積」とは, 一年性作物作付け面積, 休耕地, 永年性作物耕地のその他の農用地を含む。  
前の表から分かるように, 1971年から1980年にかけて, 牧草地・牧場森林, その他の面積比率がいずれも低下しており, 農場の有効利用が進んでいる。このことは, 以下で議論する経営規模の零細化について考察する場合, 注意しなければいけない。
- 11) 同上, 219ページ。
- 12) 森沢前掲論文, 23ページ。
- 13) Rene E. Ofreneo, pp. 102-107.
- 14) Ibid, p. 102.
- 15) 梅原前掲論文, 207-216ページ。
- 16) 同上, 218-219ページ。
- 17) 「フィリピンの農業」国際農林業協力教会, 1987年, 31ページ。
- 18) 日本人の研究では, 梅原氏, 菊池氏, 速水氏のものが有名である。
- 19) R.S カリヤンタ「フィリピンの貧困」連合出版, 1988年, 60ページ。
- 20) 寺崎康博「フィリピンにおける経済発展と所得分布研究(その2)」アジア経済研究所, 1984年, 67-68ページ。

#### 資料

- 1980 CENSUS OF AGRICULTURE VOLUME 1, NEDA.
- 1980 CENSUS OF AGRICULTURE VOLUME 2, NEDA.
- 1971 CENSUS OF AGRICULTURE, NEDA.
- 1980 CENSUS OF HOUSING AND POPULATION, NEDA.
- 1971 CENSUS OF HOUSING AND POPULATION, NEDA.
- 1975 STATISTICAL YEARBOOK, NEDA.
- 1987 STATISTICAL YEARBOOK, NEDA.